



CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

Contents

1. 地域により梅雨の雨の降り方は違います
～梅雨入りが早かった西日本 今後の状況に注意を！
2. お天気よもやま話
平年値が新しくなりました

ニュースレターの刊行に際して

NPO法人環境防災総合政策研究機構（CeMI）

気象防災支援・研究センター

センター長 村中 明



今年は例年になく早く雨のシーズンがやってきました。昨年は、熊本県の球磨川流域で梅雨前線による大雨で大きな被害が出ました。一昨年の台風第19号による大雨や「平成30年7月豪雨」など、近年は毎年のように大きな気象災害が起こっています。大雨や台風による暴風など自然現象の発生を抑えることはできませんが、それに伴って起こる気象災害については、事前の備えや適切な行動によって被害を最小限にとどめることは可能です。なかでも人の命を守ることは気象防災の最優先の課題です。

NPO法人環境防災総合政策研究機構〔以下、CeMIと略〕では、これまで多くの自治体あるいは住民組織と協働でタイムライン、すなわち事前防災行動計画の策定や運用の支援を行って来ています。タイムラインの運用を通して防災活動に実績を挙げている自治体もあります。

気象災害による被害を抑えるためには、日頃から気象に関心を向けて、大雨や洪水など災害につながる現象に備えておかなければなりません。日本最古の記録書のひとつである『熊野年代記』には西暦473年に熊野地方で暴風があり、多くの樹木が倒壊したとの記録が残されています。日本では気象に限らず地震や火山など自然災害に関わる記録が多く残されています。私たちの祖先は

多くの自然災害の危険にさらされてきました。一方、現代を生きる私たちには、長い間、多くの災害を経験してきた先人の知恵が残されています。

防災に関わる経験、知識は現代の防災においても当然活かされるべきものであり、災害が頻発する現代だからこそ人の命を守ることにつなげていくべきでしょう。

CeMIの気象・防災支援研究センターでは、気象への関心を深めていただくとともに、先人の知恵や経験などもふり返りつつ、気象防災につながる話題を提供することを目的に、今般、ニュースレターを毎月1回、刊行することになりました。

大雨や暴風など、顕著な気象現象に対して身を守る行動は、気象に関する高度な知識や経験を必要とするものではありません。普段から気象に関心を向けていただき、「いざ！」となった時に素早く危険を回避する行動につなげることが大切です。

ニュースレターでは、身近に起こる現象や季節の話題なども合わせてお伝えしていきたいと思っています。

短時間で気軽に読める内容の話題を提供していきます。お手元に届いた際には、ぜひ一読していただければ幸いです。



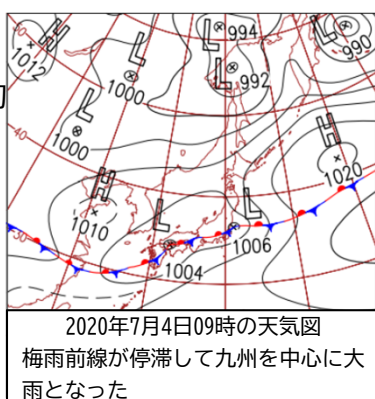
1 地域により梅雨の雨の降り方は違います ～梅雨入りが早かった西日本 今後の状況に注意を！

東海地方より西の地方では5月16日までに梅雨入りしました。九州から東海地方では統計開始以来1番目か2番目に早い梅雨入りの記録です。九州などではすでに何度か大雨となっていますので、梅雨末期の大雨が心配です。

梅雨は、春から夏への季節の変わり目にみられる曇りや雨が続く時期のことをいいます。太平洋高気圧とオホーツク海高気圧（あるいは大陸の高気圧）の間に梅雨前線が形成されて日本列島に停滞することによって梅雨となります。

今年はずでに東海地方まで梅雨入りしていますが、平年ですと、沖縄・奄美地方が5月上旬に梅雨入りし、季節が進むにつれて太平洋高気圧が強まっていくため、梅雨前線が北上して、6月上旬に、西日本、東日本が梅雨入りします。

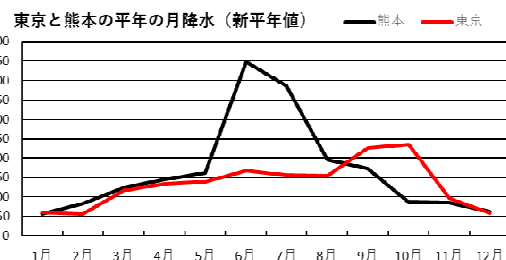
梅雨前線は、毎年のように大雨による災害をもたらします。太平洋高気圧の周辺部を回るように大量の水蒸気が南西風によってもた



らされるため、西日本、特に九州で梅雨末期の災害が多くなっています。昨年（2020年）も7月4日には熊本県の球磨川流域を中心に豪雨によって氾濫などによって大きな被害が出ました（左下図の天気図参照）。

一方で、関東地方では梅雨前線による大きな災害はあまり見られません。これは、南西からの湿った空気が直接流れ込むことが少ないためです。逆に、オホーツク海高気圧が強いときなどは北東からの冷たい湿った空気が流れ込んでくることもあり、「梅雨寒」のように低温になることがあります。東北地方の太平洋側などでは「やませ」が発生して日照不足と低温で農作物に大きな被害が出ることもあります。

下の図に東京と熊本の平年の月降水量を示します。熊本は梅雨の時期に降水量のピークが見られますが、東京は明瞭ではありません。逆に台風の時期の9月と10月に降水量のピークが見られます。同じ日本でも梅雨の影響は大きく変わります。



2 お天気よもやま話 ～平年値が新しくなりました

「今日の最高気温は18℃で平年より3℃ほど高くなりました。」などと天気予報でもよく見聞きするこの「平年」という言葉。気象庁では「いつもの年と比べる指標」として平年値というものを算出しており、その値と比較したときこのように使われます。

平年値は過去30年間の観測値を平均したものです。今年が更新の年にあたり、5月19日から新しい平年値が使われています。新平年値は1991～2020年の観測値によるものになり、旧平年値（1981～2010年の観測値による平年値）と比べて、変わるものと、あまり変わらないものがあります。まず、平年値が更新されてもあまり変わらないことから挙げてみますと、台風については、発生数も、日本への接近数や上陸数も新平年値は現平年値から大きな変化はないとのこと。梅雨入り・梅雨明けの時期についても新しい平年値でも大きな変化はありません。

次に、変わるものですが、降水量は夏の西日本や秋と

冬の太平洋側の多くの地点で10%程度多くなるようです。

近年、雨の降り方が激しくなってきたと実感されている方も多いと思いますので、予想通りの結果かもし

れません。年間の平均気温も全国的に0.1～0.5℃程度高くなります。年によって変動はありますが、日本の気温は長期的には上昇傾向が続いています。変化はわずかでも、このままこれらの傾向が続くと、様々な現象が激甚化し、大きな災害も、より起きやすくなるでしょう。季節の進みも大きく変わってしまうかもしれません。

今年各地で、さくらもかなり早く開花しました。さくらの開花は、今回の更新では、ほとんどの気象官署で1日から2日早くなりましたが、次回の更新時には、もっと早まるのでしょうか。季節がおだやかにうつろう日本であり続けてほしいですね。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構 (CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

